

アルルに滞在中のフィンセント・ファン・ホーホ(ゴッホ)は、弟のテオ宛に、こんな手紙を綴っている。「地図のうえて町や村々を指し示す黒い点々は僕を夢想に誘うけれど、それと同じように単純に、星空を見ると、僕は何時でも夢想に誘われる。フランスの地図のうえの黒い点々は実際に訪れることができるのに、なぜ天蓋に輝く点々は手に届かないということがありえようか——そう僕は自問する。ノタラスコンヤルーアンに行くのに列車に乗るのなら、星に行くには死に乗ればよい。こんな思案のうちで、確かに間違っていないのは、生きているうちは星には行けないけれど、それに劣らず、死んでしまえば列車には乗れない、ということだ。ノ要するに、汽船や乗合馬車や鉄道が地上の機関車であるように、コレラや砂状結石、肺病や癪が天空の機関車である、というのも不可能ではないだろう。ノ老いて静かに死ぬのは、天に歩いて行くこと、だろうか。」(書簡506信1888年7月頃)

画家などという職業は、生きている間は儲からないが、死後に名声に包まれば、その作品の価値も天文学的になる——といった議論の最中に、この一節が不意に出現する。「そうして見れば、おそらく画家の生

銀河鉄道はどこから来たのか

宮澤賢治とファン・ゴッホとを繋ぐ糸

国際日本文化研究センター
総合研究大学院大学院大助教授
稲賀繁美

涯というものにおいて、死とは画家が遭遇する最大の困難ではあるまい。ノその死なるものが、いかなるものか知っている、などと、僕は金輪際言い張らないけれど」と、という宣言に続くのが、冒頭の言葉だった。ゴッホの生前、その作品はほとんど商品価値を得なかったが、これは、生きているあいだには、詩集『春と修羅』と童話集『注文の多い料理店』を自費出版で出しただけの、岩手の無名の詩人、宮澤賢治にも、そのまま当てはまる境涯だ。その賢治がゴッホの熱心な読者だったことは、『春と修羅』に収められた「ゴッホサイプレス之歌」(1919-21)からも明らか。「怒りは燃えてノ天空のうづ巻をさへ灼かんとすなり」とは、地上に仮ならぬ生を受けた憤怒を天空に投射する詩句であり、「おれはひとりの修羅なのだ」との自覚は、賢治がほかならぬファン・ゴッホとも共有した自意識だった。

『銀河鉄道の夜』で、ジョバンニが取り出した切符を見た車掌に、賢治はこう語らせる。「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんたうの天上にさへ行ける切符だ。(中略)あなたの方大したもんですね」と。言うまでもなく、カムパネルラは、舟から川に落ちた友人ザネリを救お

うとして溺死する。自己犠牲によって天の星となるカムパネルラが手にしたのが、この「切符」だった。やがて銀河という天上の「川の向こう岸が俄に赤く」なる。「ルビーより赤くすきとほりリチウムよりもうつくしく酔ったやう」な蠍座のアントレス。その「蠍の火」の由来を、同乗の女の子が語る。小さな虫を無数に殺してきた蠍が、井戸に落ちて溺れ、こう神様に祈ったのだ、と。「こんなにむなしく命をすてずどうかこの次ぎにはまことのみんなの幸せのために私のからだをおつかひ下さい」。「そしたらいつか蠍はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になって燃えてやるのやみを照らしてゐるのを見たって。」

自己犠牲による贖罪と、それによる世界の救済——それは、弟テオの家族を金銭的な負担で圧迫する罪障感に苛まれたフィンセント晩年の強迫観念だった。同様の強迫は、賢治にあっては、「よだかの星」の捨て鉢な自虐的自殺願望から、「グスコフドリの伝記」に見られる醒めた社会的自己犠牲に至る振幅を孕みつつ、様々に変奏された。現世での負債を死後に返済し、天空の星へと転生することを祈った詩的な魂の共鳴が、銀河鉄道の夢境に交錯している。

思
考
の
隅
景